

# ラファエロの「アテネの学堂」について：ヒポクラテスは西洋哲学史で、どのように評価されていたか？

著者名(日)	斎藤 博
雑誌名	埼玉医科大学進学課程紀要
巻	7
ページ	77-84
発行年	1998-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1386/00000111/">http://id.nii.ac.jp/1386/00000111/</a>

## ラファエロの「アテネの学堂」について：

ヒポクラテスは西洋哲学史で、どのように評価されていたか？

斎 藤 博\*

キーワード：ラファエロ、ヒポクラテス、肖像、ギリシア、哲学史

### まとめ

私はラファエロの「アテネの学堂」には、医師ヒポクラテスが描かれていると推測した。ラファエロは「アテネの学堂」の最上段には神の世界を、上、下段に人間の世界として、左には知の世界を、右には術の世界を描いた。そして、ギリシア哲学者中、「神に等しい者」に適う人物を、上段の人物中に描いた。特に、プラトンとアリストテレスを高く評価し、中央の王道に二人を配置し、彼等の頭上には神への道が開かれていた、と表現したのではなかろうか？なお、ラファエロはヒポクラテスを、技術の守護神アテネの下の上段右に「神に等しい者」として置き、その下段右隅には、人間である術者、画家ラファエロ自分自身を署名者として置いて、「アテネの学堂」を完成させた、と解釈出来ないか？

「アテネの学堂」に描かれている神と人物について、従来の解釈に私の推測とを加えると以下のごとくなる。

- 最上段左 1 アポロン (詩と音楽の神)  
最上段右 2 アテナ (知と学問の神、技術の守護神)
- 上段左 3 スパルタ主義者、4 タレス、5 クセノポン、6 ソクラテスと弟子  
中央 7 プラトンと弟子、8 アリストテレスと弟子 (アレキサンダー大王)  
右 9 エピクロス 10 アルキメデス、  
11 デモクリトス、12 ヒポクラテス、  
13 ヘロドトス

\* 埼玉医科大学総合医療センター泌尿器科  
〒350-8550 埼玉県川越市鴨田辻道1981

下段左 14 クセノファネス、15 ピュタゴラスと弟子、16 ゼノン、17 パルメニデス

中央 18 ヘラクレイトス、19 ディオゲネス  
右 20 ユークリッド、21 ゾロアスター、  
22 プトレマイオス、23 ラファエロ、  
24 ソドマ (または、ペルギーノ)

最下段左壁面 25 象に乗ったオルフェウス (詩と音楽の冥界の神)

このうち、\_\_\_\_\_の人物は私の推測である。

### はじめに

ヒポクラテスは紀元前460年、ギリシアのコス島の出身で、医祖、または、医神とも言われ尊敬されている。ヒポクラテス関係の著述は、医術が主であるが、哲学、倫理、自然科学の全般にわたっており、後年、「ヒポクラテス全集」としてまとめられている。膨大な著作集ではあるが、その成立年代や、著者については不明の点が多い(1-4)。ヒポクラテスはギリシア時代の代表的な哲学者であるソクラテスとほぼ同年代で、プラトンやアリストテレスは少し年代が下がり、ピュタゴラスは年代が遡る。

ヒポクラテスの医学史における評価は別にして、哲学史における評価としては、ギリシア哲学者に関して現存する唯一の文献であるディオゲネス・ラエルティオスの「ギリシア哲学者列伝」(5)には、ヒポクラテスの項はなく、医師、或いは、有名な医師として引用されているに過ぎない。一方、ギリシア哲学界の中心人物であるプラトンとアリストテレスの著述には、ヒポクラテスに関する引用もあり、一部の哲学者には、高く評価されていたと推測される(1, 3)。ヒポクラテスの評価



図1. ラファエロのアテネの学堂 (9) より複写

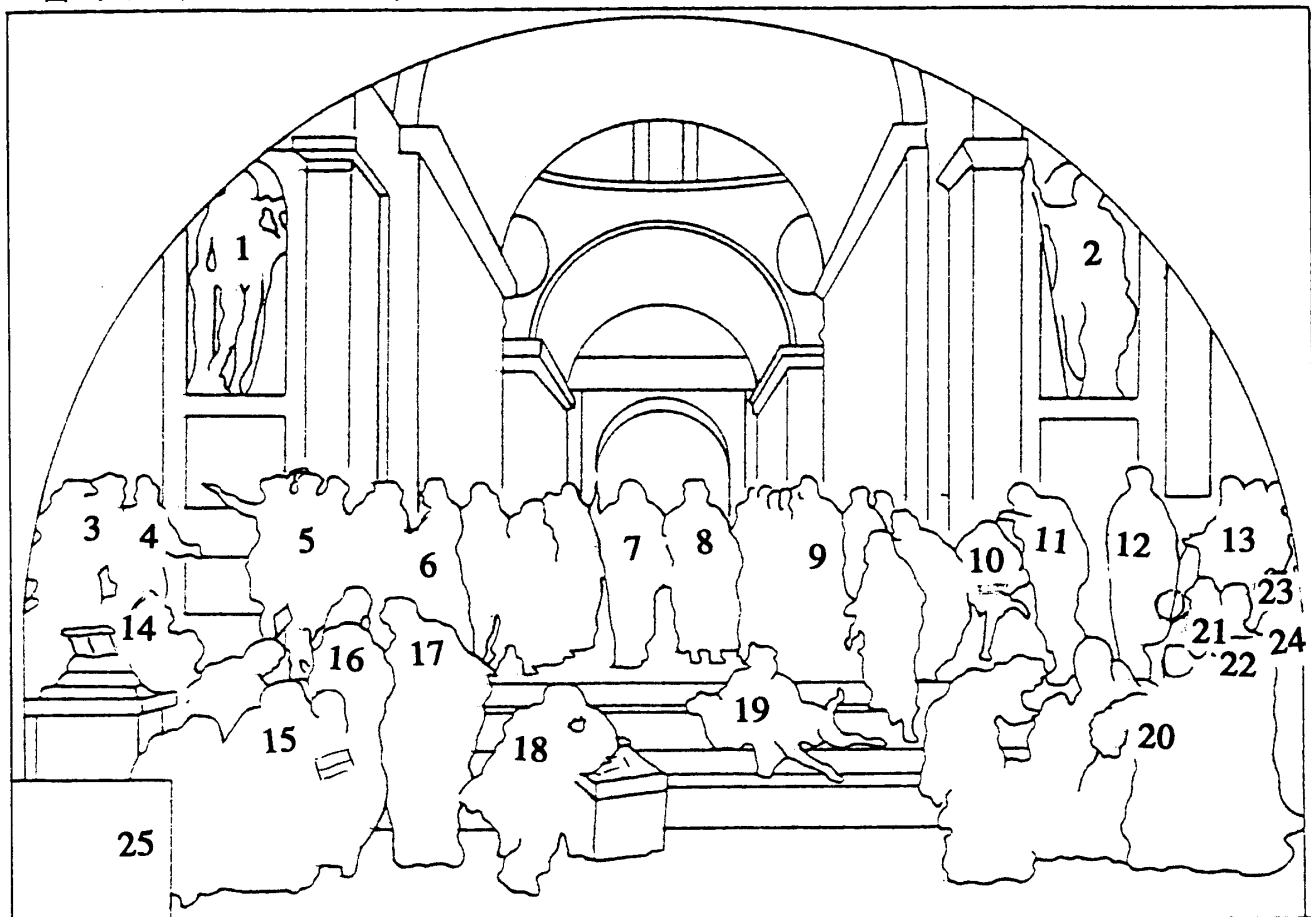


図2. 神と人物：まとめと対比

は、時代や人により異なっている（6，7）。

### アテネの学堂に招かれた人々

それでは、ギリシア時代と近代との間で、ギリシア文明が再評価されたルネッサンス時代では、ヒポクラテスはどうか評価されていたであろうか？

ラファエロ（Raffaello Sanzio, 1483-1520）の、ローマのヴァチカン宮、署名の間にある「アテネの学堂」（写真）は、「古代世界の最も著名な哲学者や科学者たちを一堂に集めた理想的な集会の表現」（佐々木英也）（8），或いは、「この絵画中には古代の天才たちが一堂に会した」（鈴木杜幾子，樺山紘一）（9）と言われているが、17世紀になってから、「アテネの学堂」と名付けられたようである。ダヴィンチ、ミケランジェロと並んで、ルネッサンス時代の絵画の天才と言われたラファエロのこの絵画には、多くの解釈がなされている（8－10）。ところで、ヒポクラテスは「アテネの学堂」に招かれていたか、即ち、ルネッサンス時代に哲学者、或いは、天才として認められていたかが本文の主題である。

この絵画は集会の広場（バジリカ）として描かれており、構成上、上下二段に分かれている。上段は神の世界、下段は人間界であるが、人間界はさらに後列上段、と階段の下の前列下段の二段に分かれている。ここでは、最上段、上段、下段とする。前面に広間があり、向かって左より、左、中央、右とする。広間の中央は通路となって、後方の回廊に接続し、その先のアーケイドの上方には空が認められる。神々は立像か壁画に、人間は広間に56人描かれている。

佐々木氏らの解説によると（8－10），最上段の左には、詩と音楽の神アポロンが、右には知恵と学問の神アテネが、彫刻の立像として大きく描かれている。上段、中央にはプラトンとアリストテレスが並んで、多数の人々の囲まれている。プラトンは片手に著書「ティマイオス」を縦に持ち、片手は天を指してアイデアを表現し、アリストテレスは著書「エテイカ」を横に持ち、片手を水平にさしだしている。プラトンの左には対話しているソクラテスがいる。下段左には、完全4度の音程図表、デアテッサロンの前で本を書いているピュ

タゴラスと、ピュタゴラスを囲んだ人々が描かれている。下段中央には、難解な哲学者ヘラクレトスと、犬儒者ディオゲネスがいる。右には、作図をしているエウクレイデス（ユークリッド）、天球儀をもったゾロアスターとプトレマイオスがいる。右端には画家ラファエロ（自画像）と、ソドマ（先輩）かペルジーノ（師）が描かれている。プラトン、アリストテレス、ヘラクレイトス、ユークリッドは、ダヴィンチ、ミケランジェロ、ブラマンテをモデルにしたと言われているが、どの人物がどれかについては解釈に違いがある（8，9）。

上記の人物以外に、アルキメデス、エピクロス、パルメニデス、アルキビアデス、アレキサンダー大王の名が挙がっているが、どの人物がどれかは不明である。本文の主題であるヒポクラテスの名は、佐々木英也、鈴木杜幾子、樺山紘一、James H. Beck（8－10）らの著述には記されておらず、ヒポクラテスはギリシアの哲学者や天才の仲間には入っていない。

### ヒポクラテスは「アテネの学堂」に招かれていないか？

しかし、この有名な人物は医祖として、「アテネの学堂」に招かれる資格は、十分にあると推測される。ただし、ヒポクラテスの確実な肖像画は現存せず、どのような人物かは不明である（3，4）。僅かに、アリストテレスと伝記作家ソラノス（紀元2世紀頃の産科医）のヒポクラテスの顔つきに関する記載があるのと、ヒポクラテスとされる石像が言い伝えられているに過ぎない（1，2，4）。

歴史ミステリーとしての未知の犯人探しの興味ではあるが、もし、ヒポクラテスが「アテネの学堂」にいたとしたら、どこにいたかが問題である。話の順序が逆ではあるが、ヒポクラテスが居る可能性についての後段での検討を踏まえて、描かれて居ると仮定して、ヒポクラテス探しに取りかかる。ラファエロはギリシア哲学界を研究し、十分に計算してこの絵画を描いたもので、「アテネの学堂」の登場人物とその配置に意味があるとする（9）。有名、無名の人物が居るに違いないが、ラファエロはどの人物を重視し、どのように配置し

たかは、哲学者ではない画家ラファエロの哲学観や、ルネッサンス時代の学の分野や分類を知る上で興味もたれる。

まず、登場する人物の配置、大きさ、顔つき、衣服、身体表現を検討する。学派の始祖や大物、例えば、プラトン、アリストテレス、ゾロアスター等は、大きく、顔つきもしっかりと描かれている。師弟や学派は集団で描かれていると推測される。ソクラテスの周りの人物として、弟子の中から、例えば、クセノポン、アイキネス、アリストイッポス、パイドン、シノレス等の名が挙げられる。ただし、鎧甲をつけた戦士は、クセノポン(5)で良からう。戦闘に強いアンティステネスも考えられるが、彼は後に犬儒者となったから、ディオゲネス同様の衣服を着せるべきかもしれない。この学堂の場面に敢えて、戦士を登場させたことは、ラファエロがギリシア哲学界を十分に研究していたことの傍証となろう。身体や衣服の特徴として、帽子か被りものをしている人物は、旅行者か(3)、ギリシア人以外の人であろう。ツァラツストラはペルシャ人であるが、ゾロアスターとギリシア読みされることから、広い意味でギリシア哲学界の一員とみなしても良いだろう。ただし、天球儀を持っているから、ここでは宇宙論者と言えよう(8)。ラファエロもギリシア人ではない。ピュタゴラスはエジプトに行っているから、ピュタゴラスの左後方の人物はエジプト人かもしれない。

上段左端の上半身裸の人物は運動する人、スポーツマンとも考えられる。下段左と、上段右に本を書いているか、計算している人物がいる。明確な指摘はないが(8)、アルキメデスかもしれない。特に、上段右の人物は一生懸命勉強しているようである。下段左の人物は頭に月桂冠を頂いていることから、詩人と言われているが(9)、月桂冠の人物はこれだけである。同じ「署名の間」にある「パルナッソス」中の詩人はすべて月桂冠を頂いており、盲目の詩人ホメロスも描かれている。同様に、聖職者は「教会の勝利」に描かれている。

もし、ヒポクラテスが居るとしたら、師弟関係や学派から推測して、アリストテレス、プラトン(上段中央)ソクラテス(上段左)、ユークリッド(下段右)の周囲に居る可能性は低い。可能性が

高いのはピュタゴラス(下段左)の周辺である。ヒポクラテスはピュタゴラスの影響を受けており、有名な「ヒポクラテスの誓い」は、ピュタゴラス派の誓いとも考えられている(3, 4)。

まず、下段左のピュタゴラスの周辺に注目する。ピュタゴラスの上方に起立して白い服を着て、美しく描かれている人物が目につく。エレアのゼノンは綺麗で、背が高かったと記載されているから(5, 9)、ゼノンかもしれない。ギリシア哲学界にはもう一人ゼノンがいるが、こちらは美男子ではないと言うよりも、足が太く醜いようだ(5)。この人物は女性ではないと思うが、もし、この人物がゼノンとすれば、その隣は師のバルメニデスであろう。ゼノンはバルメニデスの情人、稚児であったと言われている(5, 11)。

下段左の本を書いている人物は、しっかりした目鼻だちをしていることから、しかるべき人物と推測されるが、少なくとも盲目の詩人ホメロスではない。ピュタゴラス学派、バルメニデス、ゼノンに近い人物と言え、エレア学派の始祖クセノファネス(5)が考えられる。クセノファネスは詩人としても有名であるから、月桂冠を頂いても良い。ヒポクラテスは経験を重視しているから(3)、先生の書物を覗いて、学説を丸写ししている人物も除外してよからう。ヒポクラテスらしい人物は、この付近には見当たらないようだ。なお、左下の壁画には、象に乗ったオルフェウスが描かれていると考えられる。

上段左に移る。左端の上半身裸の人物は、新しい資料を持って来る人物と解釈されているが(8)、哲学を最初にもたらした一行とも考えられる。タレスはギリシア哲学の始祖であるが、アナクシマン드로ス、ソロンなど七賢人も考えられる。七賢人の項には、「スパルタ主義者であることは、体育を愛することよりも、むしろ知恵を愛することであることを覚った人々」との注釈がある(11)。ギリシア哲学のもう一方の大物、イタリア派のピュタゴラスは下段左にいるから、イオニア派と言うより、ギリシア哲学の始祖とも言えるタレスと、スパルタ主義者が、上段左にいても不思議ではない。上段左端から三人目の人物は、タレスかもしれない。



図3. 同部分：問題の人物（図2，12の人物）

次に、上段右に注目すると、一人起立して大きく描かれている人物が目につく。この人物は今迄に名前の挙がった著名人と同様に大人物、と言うより、「アテネの学堂」中の最大に近い人物である。それでは、ギリシア哲学史のなかで、大きく描かれるべき人物、即ち、偉大な人物とは誰であろうか？この問題の人物の頭は禿ており、威厳にみちている。

この人物こそ、ギリシア哲学界の中心人物であるプラトンとアリストテレスが、偉大としたヒポクラテスではなかろうか？ヒポクラテスには膨大な「ヒポクラテス全集」（1，2）が伝えられているが、記録の量としては、プラトンやアリストテレスのそれに匹敵すると考えられる。アリストテレスは大ヒポクラテスと敬称している（1）。また、「アリストテレスはヒポクラテスは背の低い男だったが、偉大さを表すために、肖像は厳粛な風貌の持ち主として描きたかった」とも書かれている（4）。

もし、この人物がヒポクラテスではないとしたら、一体、誰であろうか？この人物については、アリストテレスの「実践的知性」との解説があり（9）、同時にその三人左の人物を「理論的知性」としている。プラトンが天を、アリストテレスが水平を指しているのに対して、この人物は地を指しており、ギリシア哲学界の三人の一人とも考えられる人物で、その重要性が示唆されており、全く架空、または、象徴的人物とは考え難い。この人物をピュタゴラスとする説があるが（8）、ピュタゴラス右下の人物でよからう。ピュタゴラスの頭上には詩と音楽の神アポロンがおり、左には、詩と音楽の冥界の神でアポロンの子供のオルフェウスがいる。アポロンとオルフェウスはピュタゴラスと特に密接な関係にある（11，13，14）。

残りの人物については、アリストテレスの弟子の右と、この問題の人物の左の間の二人の人物を、勉強している物理学者のアルキメデスと原子論のデモクリトスと想定した。デモクリトスはギリシア哲学者中、ヒポクラテスと親交があり、会話が残されている唯一の人物である（5）。アルキメデスの左はエピクロスが考えられる。

この問題の人物の右隣には杖をつき、頭に被りものをしている人物がいる。杖と被り物は旅行者の印であるが、杖は盲目の印とも考えられる。ソラノスのヒポクラテス伝によると、ヒポクラテス像には頭に被りものをしている像があるが、これは、頭が禿げているのを隠すためとか、高貴の人物であるためとか、旅行しているため等の説を記載している（2）。ヒポクラテスは診療のために、方々旅行しているから（3）、ヒポクラテスの可能性はある。禿げは醜いとも、奇形とも言われた時代であるが（3）、この頭に被りものをしている人物は、少なくとも前髪は認められる。ヒポクラテス以外では、アルキメデス側の右端には、理論的哲学者ではない実践的人物として、歴史家ヘロドトスなども考えられる。

この人物を強いて、ヒポクラテスに関係付ければ、ヒポクラテスの息子のデサラス（テッサロス）や、アリストテレスが高く評価しているヒポクラテスの女婿のポリュボスなども考えられる。ポリュボスは「ヒポクラテス全集」の一部を書いたと

言われており、デサラスもコスからアテネに旅行したことになるっており、大演説が残っている。もっとも、後世の作との説もある（1, 2, 3）。

上段右の問題の人物は、やはり、ヒポクラテスで良いのではなかろうか？ヒポクラテスは「実践的知性」（9）の人であり、ラファエルと同様の術の人である。

### 考察：西洋哲学史とヒポクラテス

ヒポクラテスは「アテネの学堂」に招かれてしるべき人物か？ヒポクラテスは哲学者と言えるか？もし、哲学者としたら、哲学界ではどの地位を占めるべき人物か？これらの疑問を抱いて、「アテネの学堂」に描かれた約50人の名前か、身分の特定を試みたが、そこに描かれている人物は架空の人物ではなく、ギリシアの著名な哲学者や天才と言われた人物に対応している。そこに登場する人物とその配置から推測して、ラファエロはギリシア時代の世界は、人と共に神の世界があり、知だけでなく術が重要であったと考えたのではなかろうか？

ギリシア時代は神（*θεός*）と人間（*ἄνθρωπος*）の世界があるが、同時に、人間のうちには、特に優れている者として、神に等しい者（*ἰσοθέος*、等神者）がいたと考えられる（15）。プラトンは神を完全なる知者（ソフィスト）と呼んでいる（11）。また、ヘラクレスのように、両親の片方が神性で、死後、神として取り扱われる半神、神人（ヘロス）と言うものもある（16）。即ち、神、神に等しい者／半神／神人、人間の三段階の世界である。ゼウスの娘で知恵の女神アテナ（ミネルヴァ）は男女の技術の守護神である（10）。アポロン（アポロ）は詩、音楽、予言、医術の神であり、ヒポクラテス派の開祖、医師アスクレピオスはアポロンの息子である（1）。

「アテネの学堂」に描かれている人物は、哲学者が主であるが、今日、哲学者とは言われていない人物も描かれている（6-10, 17）。哲学の意味も現代とは異なっていると考えられる。哲学と言う言葉を最初に用い、また自らを哲学者（知恵を愛する者）と呼んだのはピュタゴラスである（5）。一般に、ソクラテスのキーワードは愛知

（*φιλοσοφία*）と言われているが、ヒポクラテスも愛知と言う言葉を使用しており、愛知がソクラテスの専売特許ではない。「ヒポクラテス全集」では、「哲学者である医師は、実に神の位にもその座を占めるべきものである」（*ἡ γὰρ τοῦ σοφοῦ ἰσοθέος*）（13）としている。即ち、「医師」ヒポクラテスは「哲学者」であり、「神に等しい者」と言えよう。

ただし、ヒポクラテスのキーワードは、ソクラテスの愛知に対して、愛術（*φιλοτέχνη*）と考えられる。*φιλοσοφία* と *φιλοτέχνη* は、*φίλος* を接頭語にする言葉で、直訳すれば、愛知と愛術である。愛知は後に哲学と訳され、知とは異なる意味が付加された。これに対して、術（*τέχνη*）は後に芸術と訳されたため、愛術（*φιλοτέχνη*）に関する適当な訳語は見当たらないようである。哲学に対して、哲術も可能と考えられるが、日本語としては未熟である。術を愛したヒポクラテスは、「術の道は長い」と言った（*ἡ τέχνη μακρά*）。「人間を愛する者は、術を愛する」とも言った（*ἦν γὰρ παρὴ φιλανθρωπίη, πάρηεστι καὶ φιλοτεχνίη*）。また、医術を「あらゆる技術の中で最も卓越した技術」といった。（*Ἰητρικὴ τεχνέων μὲν πασέων ἐστὶν ἐπιφανεστάτη*）（1, 13）。

「アテネの学堂」の人物は左右で性格が異なる。哲学と科学、観念論と唯物論、理論と実践などの対比がされている（8, 9）。しかし、ここはギリシアの世界であるから、現代語ではなく、ギリシア語の知（*σοφία*）と術（*τέχνη*）とで表現することも可能と考えられる。ただし、知は一般的な教養（*παιδεία*）と言う意味にも取られるし（9）、ソフィストは哲学者と詩人を指しているという記載もある（5）。西洋美術の伝統では右は左より優位と言われている（9）。ただし、ここでは左右の記述は逆で、向かって左が右側である。即ち、プラトン側が知の世界で、アリストテレス側より優位である。

人間界の上段、下段については、ラファエロの「アテネの学堂」の上段は思弁の世界、下段は感覚の世界を代表しているとの解説がある（9）。「アテネの学堂」の中央上段は、プラトンとアリストテレスだけが占めて、頭上には空が、即ち、天が

見える。ラファエロはプラトンとアリストテレスが「神に等しい者」に適う人物で、彼等の頭上には神への道が開かれていた、と表現したのではなからうか？二人は王道を歩いており、まさに、別格の扱いである。

ソクラテスとタレスとおぼしき人物も上段で、手を左方と右方を指し、プラトン、アリストテレスと問題の人物の手が上、前方、下を指しているのに対応している。ただし、この問題の人物は左手で指しているが、大地か、ゾロアスターの天球儀を指しているかは不明である(8)。左手で指している像は少ないが、アスクレピオスが左手で、神と病人の直接的で個人的な関係を表現している像がある(18)。下段は大地に腰を下ろしている人物が多いが、勉学を意味しているらしい(8)。ちなみに、幾何学のユークリッドは下段左で、王道にはいない。術者の画家ラファエロも下段左である。

ラファエロは「アテネの学堂」のプラトン、アリストテレス、ユークリッドのモデルとして、ダヴィンチ、ミケランジェロ、ブラマンテを用い、さらに、自画像をそこに描いている。ギリシア時代の知に対して、ルネッサンス時代の術の対応、或いは、それ以上に、術者である画家ラファエロの、術に対する尊敬と自信の表れとは考えられないか？

### ヒポクラテスはどの様に評価されていたか？

ラファエロがヒポクラテスをどの様に評価していたかを示す直接の資料はない。ルネッサンス時代の医術史では、治療学で有名なテオフラストゥス・フォン・ホーエンハイム（別名パラセルスス、1493年生まれのスイス人の医師、後にバーセル大学医学の教授に任命された）は、第二のヒポクラテスであると自慢していたとの記載がある(19)。また、理髪外科から外科を創ったアンブロアズ・パレ(1517-1590)はヒポクラテスを引用しており(3)、当時、ヒポクラテスは有名だったと推測される。

ラファエロとほぼ同年代のハンス・ホルバイン(子)(1497/98-1543)の「死の舞踏」に見られる如く、疫病による死は当時の重大問題であったと

推測される。ラファエロは優男で、37歳で急死したと言われている(9)。比較的若死しているが、医師との交渉はあったであろう。「アテネの学堂」を描くに当たり、ヴァチカーノ周辺の知職人から意見を聞いたであろうし、教皇ユリウス2世、レオ10世には当時の名医が侍っており、彼等から、神の如きヒポクラテスの評判を聞いたとしても不思議ではない。

結論として、私はラファエロの「アテネの学堂」には医師ヒポクラテスが描かれていると推測した。ヒポクラテスはソクラテスと同様に愛知者（哲学者）であり、更に、愛術者（哲術者）として高く評価されるべき人物で、その地位は人間以上に「神に等しい者」として、「アテネの学堂」に招かれてしかるべき人物と考えられる。

追加の問題として、ヒポクラテスの確実な肖像画は存在しないが、この人物がヒポクラテスとした場合、ラファエロはその肖像画をどこから借用したのであろうか？顔つきはあまりはっきりとは描かれていないのは、適当なモデルがおらず、ラファエロは顔つきの描写に自信がなかったためかもしれない。逆に、もし、この人物がヒポクラテスとするならば、ヒポクラテスの肖像画の一つになるのかもしれない？

謝辞。哲学史、ギリシア語の文献に関しては、杉田勇氏(埼玉医科大学進学課程哲学科名誉教授)の授助と助言を頂いた。ここに感謝の意を表する。

### 文 献

- 1) 今裕訳編：ヒポクラテス全集，東京，名著刊行会，昭和53年。
- 2) 大槻真一郎訳：ヒポクラテス全集，東京，インタープライズ（産学社），1985-1988。
- 3) 斉藤博：ヒポクラテスの謎，東京，図書印刷，1996。
- 4) アルバート・S・ライオンズ，R・ジョセフ・ペトルセリ：図説 医学の歴史，小川鼎三監訳，東京，学研，1983。
- 5) ディオゲネス・ラエルティオス：ギリシア哲学者列伝，第2版，加来彰俊訳，岩波文庫，東京，岩波書店，1994。
- 6) ヘーゲル（Hegel GEF, Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie），歴史哲学講義，5版，長谷川宏訳，岩波文庫，岩波書店，東京，1996。
- 7) シュヴェークラー（Albert Schwegler, Geschich-



- te der Philosophie im Umriss), 西洋哲学史, 谷川徹三, 松村一人訳, 岩波文庫, 岩波書店, 東京, 1996.
- 8) 佐々木英也: ラファエロ. イタリア・ルネサンス, 世界美術大全集 12 巻, 久保尋二, 田中英道編集, 東京, 小学館, 1994.
  - 9) 鈴木杜幾子, 樺山紘一: アテネの学堂, 名画への旅 7, 盛期ルネッサンス 1, モナ・リザは見た. 木村重信, 高階秀爾, 樺山紘一監修: 東京, 講談社, 1992.
  - 10) James H.Beck: Raffaello (日本語版), 若桑みどり訳, 東京, 美術出版社, 1976.
  - 11) 山本光雄訳編: 初期ギリシア哲学者断片集, 東京, 岩波書店, 1974.
  - 12) ブルフィンチ: ギリシア・ローマ神話, 野上弥生子訳, 岩波文庫, 東京, 岩波書店, 1996.
  - 13) 萩野弘之: 古代ギリシアの知恵とことば, NHK 文化セミナー, 日本放送出版協会, 東京, 1997.
  - 14) 加藤信朗: ギリシア哲学史, 東京大学出版会, 東京, 1996.
  - 15) Jones W.H.S: Hippocrates with an English translation by W. H. S. Jones. London, William Heinemann Ltd, 1923.
  - 16) ヘロドトス: 歴史, 松平千秋訳, 34 版, 岩波文庫, 東京, 岩波書店, 1996.
  - 17) ヴァザーリ: ルネサンス画人伝, 田中英道, 小谷年司, 平川祐弘訳, 東京, 白水社, 1982.
  - 18) カール・ケレーニイ: 医神アスクレピオス. 岡田素之訳, 白水社, 東京, 1997.
  - 19) ハッガード: Devils, Drugs and Doctors. 古代医学と分娩考, 巴陵宣祐訳, 東京, 武俠社, 昭和 6 年.